

田上 時子のエッセイ

平成28年(2016年)

年初から大荒れの幕開け

年末年始は暖冬だったのが一変して、1月下旬には今シーズン最強寒波襲来、冬型の気圧配置も強まり、大荒れの天気。日本列島の9割が氷点下という寒さ。

原油価格の下落、世界同時株安など、世界市場は波乱の幕開けとなったが、国内も日経平均が6営業日連続で下落となった。人口の16%が何らかの投資活動をしていると言われる中、84%には「そんな関係ない」とかという、そうではない。

国民が支払った年金保険料の一部の「年金積立金」はGPIF(年金積立管理運用独立法人)によって資産運営されているが、一部メディアが報じているように、今回の大暴落で国民の老後を支える年金が約10兆円も消えたという。

投資で成功するのは約1割と言われる中、年金の資産運用を相場に依存するのも如何なものかと考えるが、同時に市場関係者が言うように政府主導で株を買い支えて株価を釣り上げるカラクリがいつも通用するとも思えない。なぜなら、いくら官製相場であれ、世界経済に大きく影響を受けるといことが今回の大暴落で分かったのだから。

芸能界も大荒れのスタート。スポーツ新聞が連日一面に報じたのが、「SMAP解散劇」で、NHKまでニュースに取り上げる始末。激震が

走った1週間後の生番組での謝罪会見は視聴率37%以上になり、ファンのCD購買運動まで起こった。確かにこの間、街はSMAPのヒット曲であふれた。「世界に一つだけの花」を聴きながら、歌もダンスも決して上手だとはいえないグループがなぜこんなにも世間を騒がせるのかと考えた。

SMAPは公共財であり、「失われた20年」の日本社会を象徴した存在だと思う。

メンバーそれぞれが、エンターテナーとしての才能に加えて努力家で、個性には違いがあり、異なるファン層に対して強い訴求力で、多様化する顧客ニーズをつぶさに掴んでいる。それに加えて5人の仲間としての安定感があるのが、幅広いファン層をつかんでいる理由だろうか。

バブル崩壊後、日本の経済環境は決してよくない。漠とした不安が絶えず付きまとう。将来に希望が見えない。そんなとき、テレビをつければいつも一生懸命で笑顔のSMAPがいる。SMAPが「安心」な「居場所」になっている。

たった今(この原稿執筆中)、「甘利経済再生担当大臣、閣僚辞任を表明」の速報がテレビ画面に流れた。

波乱の幕開けの平成28年だが、どんな年になるのか。

2016